Ghostingの物語 -ドイツの音楽プロジェクト

09.02.2025

1988年、サシャの年上のクラスメイトがカセットテープを彼に渡しました。そのテープのA面には「The Sisters of Mercy」、B面には「Siouxsie and the Banshees」と書かれていました。当時まだ若かったサシャは、そのテープの両面のラベルが逆に貼られているに違いないと信じていました。というのも、「The Sisters of Mercy」と書かれた面では、とても低い声の男性が歌っていて、サシャにはとても“Sisters”とは思えなかったからです。一方の面では、かなり高い女性ボーカルの声が聞こえ、むしろこちらのほうが「シスターズ」っぽいと感じられました。「The Sisters of Mercy」を女子バンドと勘違いしたことが、当時「New Wave」と呼ばれていた音楽へのサシャの興味を引き起こす出発点になったのです。

それ以前、彼は主にクラシック音楽や中世の作曲技法に興味を持っており、学校で学んだ知識をもとに独学で習得していました。また、テクノロジーの可能性にも強い魅力を感じていました。プログラムを組んでいたコンピュータや、ジャン＝ミッシェル・ジャール、Kraftwerk、D.A.F. といったシンセサイザーミュージックに特に心を奪われていたのです。ジャン＝ミッシェル・ジャールは、クラシックの作曲技術を完全に電子楽器とシンセサイザーだけで行っていた点が強い印象を与え、Kraftwerkや D.A.F. のミニマリスティックな作曲アプローチにも彼は魅了されていました。

しかし1980年代の終わりごろ、Bad Emsという町に暮らす若い人間にとって、自分が求めるような音楽を手に入れるのはかなり難しいことでした。今のようにワンクリックですべてを手に入れられるインターネットは存在せず、Bad Emsにはレコード店もカセット店もありませんでした。CDも当時はまだあまり普及していなかったのです。したがってサシャが手にすることができた音楽は、まるで天からの贈り物——ほとんど神聖なもの——のように感じられました。なぜなら、そうした音楽を手に入れること自体が容易ではなかったからです。

そんななかで、彼が「まったく新しい」と感じ、完全に魅了されたバンドがもう2つだけ存在しました。すなわち“Dead Can Dance”のアルバム『Within the Realm of a Dying Sun』と、Coilの『Horse Rotorvator』です。これらのレコードを何カ月も昼夜を問わず聴き続けた後、サシャは「このスタイルの新しい音楽がどうしても欲しい」と強く思うようになりました。しかし先にも述べたとおり、そんな音楽を手に入れるのは非常に難しく、そのうえ何十回もダビングされたカセットテープの音質はお世辞にも良いとは言えませんでした。

そこで、そういった音楽を作るバンドがほとんど存在しないなら、自分自身で同

じスタイルの音楽を作ろう、とサシャは決めました。当時、彼にはバンドを作るつもりも、何かをリリースしようという考えもまったくありませんでした。ただ自分自身が楽しめる音楽を新たに生み出したかったのです。すでに持っている音源だけでは飽き足らず、新しいものが世の中に無い以上、ならば自分で作るしかない——そんな切迫した思いがあったのです。

そうして彼は初めてのシンセサイザー——より正確にはサンプラー——Roland W-30 を手に入れました。このサンプラー上で彼は最初の楽曲を作り始めます。これらの曲は、まだ初心者段階特有の稚拙さがあり、作曲や歌詞にも幼い naïve な雰囲気が色濃く残っていました。

もちろん、彼はそれらの曲をカセットテープに録音し、自分でも聴き、他の人にも聴かせていました。そんな彼の音楽を気に入った人々が、ステージに立つよう促したのです。

ところが当時は一人でステージに立って演奏するというのは、ほとんど一般的ではありませんでした。なおもバンド編成といえば、ドラム（本物のアコースティックなもの）、エレキギター、エレキベースがあって、キーボードを弾く人がいるならそれも生演奏するのが「普通のロックバンド」という形態でした。電子音楽はあまり評価されず、真面目に取り合われることも少なかったのです。“缶詰音楽”だの“コンセーブ（保存食）的な音”だのと揶揄され、ちゃんとした本物の音楽とは見なされなかったのです。

同じクラスには、特に親しくしており、音楽の好みが似ているアンドレアスという同級生がいました。彼はエレキギターを弾いていました。そして 1989 年、ロンドンへの旅行から戻ったサシャは、アンドレアスとともに Ghosting というバンドを結成します。サシャはロンドンで、当時生まれつつあったゴシック（Goth）シーンの最前線を直に目撃したのでした。

ロンドンでは Gossips（旧 Batcave）、Camden Palace などのクラブに足を運び、同種のクラブもいくつか訪れました。そこではイギリス独特のゴシックシーンにすっかり魅せられ、さらに今日「典型的なゴシック」と思われる要素と、当時密接に繋がっていたパンクロックの影響が混然一体となっている状況に衝撃を受けたのです。

この体験に刺激されて、彼は自分独自の音楽スタイルを生み出したいと思いました。それは一種のキュヴェ（cuvée）的な混合で、主に電子的リズムと現代的な電子和声をベースにし、クラシックの作曲技法に強い関心をもちつつ、ときに Kraftwerk や D.A.F. のようなミニマル要素を加味する、といった形でした。

1989 年、アンドレアスとサシャは Bad Ems のゲーテ・ギムナジウム（Goethe-Gymnasium）の学園祭で初めて共同出演を果たします。ただしそこで演奏したのは自作曲ではなく、Pink Floyd や Led Zeppelin といった有名ロックアーティストのカバー曲でした。当時の学園祭としてはかなりエキサイティングな内容で、同時に当時のストリート系ミュージシャンにはありがちなスタイルとも言えました。

さて、ここからは自分たちの音楽を作り、録音する段階に移ります。二年ほどで、カセットによる 2 本のデモテープ分の素材が溜まりました。タイトルはそれぞれ『Secret Books』と『Black Romantic』。後者の『Black Romantic』はその後、複数のバージョンでリリースされることになります。

『Secret Books』は非常に低品質な状態で録音されました。というのもサシャは当時、ほとんど録音機材を持っていなかったのです。すでに古びた 4 トラックのカセットレコーダーと、ART FXR という 1 台きりのエフェクト機材、それに Roland W-30 サンプラーという 1 台きりの電子キーボードがあるだけでした。そこにアンドレアスのエレキギター、マーシャルのアンプ、Boss のオーバードライブペダルとコーラスペダルが加わった形が、『Secret Books』のために用意できた唯一の装備でした。

一方、『Black Romantic』ではいくつかの楽器を追加して録音が行われ、特に Boss のフランジャー（Flanger）が目立っています。サシャは電気ベースを手に入れ、ベースディストーションを使えるようになっていましたし、何より彼が愛用する新しいシンセサイザー、Oberheim Matrix 1000 を導入していました。Matrix 1000 はアナログシンセサイザーのため、サンプラーの音とはまったく異なる、より生々しく豊かなサウンドを生み出します。これが『Black Romantic』の編成で、古典的要素をしっかりと取り入れた作品になっていました。

彼らがこれらの曲を初めてライブで披露したのは、1992 年のこと。ボン（Bonn）の “Ballhaus” という会場でした。

その夜、Ballhaus には Glasnost Records の関係者が 2 名来場していました。当時、まだ若いレーベルでしたが、彼らは Ghosting を契約し、『Black Romantic』をより大きな流通網を使って売り出し、さらに Ghosting に初のスタジオ録音（シングル “Paranoia”）の機会を与えました。Glasnost はあわせて、いくつかの大きなライブ出演の話も持ちかけます。

ですが残念なことに、このボンの Ballhaus でのライブがアンドレアスとサシャが同じステージに立った唯一の機会となってしまいました。まもなく二人のあいだで仲違いが起き、サシャは最初のスタジオレコーディングをアンドレアス抜きでやらざるを得なくなったのです。代わりに当時のパートナーだったダイアナ（Diana）が参加し、ボーカルを担当しました。ベースはサシャ本人が演奏しました。

Eternal Afflict の “San Diego” を制作して成功へ導いた Winus Rilinger が、サシャとダイアナと共に “Paranoia” と “Luna” を録音し、それらは 7 インチのアナログ盤にプレスされました。“Paranoia” は Ghosting が書き下ろし・発表した、初の本格的なダンス曲でした。

先に述べたように、当時は一人でステージに立つこと自体が珍しかったため、サシャは急いでプレスリリースを出して新しいバンドを編成しました。こうして、エレキギター、エレキベース、キーボード奏者、バックボーカルとしてのダイアナ、そしてメインボーカルとしてのサシャ――というフルメンバー構成が整ったのです。これがバンド史上、最も多くのメンバーを擁した時期であり、以降、Ghosting がこれほどの人数を抱えることはありませんでした。

その後バンドはドイツを巡るツアーを行い、特に注目すべきライブとしては、1992 年にライプツィヒ（Leipzig）で初めて行われた Wave-Gotik コンサートの夕方に出演したものがあります。これは素晴らしいライブで、バンドもオーディエンスも熱狂しました。このイベントは、以後毎年ライプツィヒで行われる全世界のゴスたちの集まりの始まりとして歴史に残ります。

その直後、バンドは初のアルバム『Romantic Death』を、Bruno Kramm（Das

Ich）の Danse Macabre Studios で録音する機会を得ました。そこは Bruno が自分のバンド Das Ich や、当時よく知られていた Relatives Menschsein といったバンドを録音していたスタジオです。バンドは主にギター、ベース、典型的なロック編成で構成されていたので、Bruno は The Cure などに代表されるゴシックロックの雰囲気とサウンドを再現するために努力を注ぎ込みました。

Bruno は見事な仕事をしましたが、録音中に口論が起こり、サシャは他のメンバー全員と袂を分かつことになります。まだ録音はすべて終わっていなかったため、当事者たちにとっては非常に困難な事態でした。それでも Bruno の腕前のおかげで完成したアルバムは、今日に至るまでバンドの歴史上で重要な節目とみなされています。

後になってサシャはこう振り返っています。
「*Sisters* のファンとしては、実はこんなに *The Cure* っぽいこのアルバムはあまり好きじゃないんだ。だけど *Bruno*、本当にありがとう――あれをこんなに *"The Cure* 風*"* に仕上げてくれたんだからね」

こうしてサシャは、自分の音楽的ビジョンを他のメンバーと協力して形にするのは難しい、とはっきり悟りました。自分が求めるものを非常に明確にイメージしていた彼は、早く新曲を書いて、その理想を実現したいと考えるようになります。

2 作目のアルバム『Songs from Fairyland』は、当時の彼の音楽観にかなり近づいた作品でした。シンセサイザーが主体で、ほぼ一人で録音を行ったのです。サシャに言わせれば、このアルバムはミニマルな現代エレクトロニクスと、ダーク寄りのサウンド、そして古典的な作曲技法が完璧に融合したものだということです――エレキギターやエレキベースを使わずに実現されているのも特徴でした。

この頃から Ghosting のライブ出演はだんだんと減っていきました。メンバーが次々に変わるなか、ホルガー・ヴィルト（Holger Wirth）などさまざまなミュージシャンが参加し、ホルガーは当時サシャにとって親友とも言える存在でした。その後ホルガーは Flatline というバンドを立ち上げ、自身の音楽観を追求していきます。

Glasnost Records からリリースされた Ghosting の最後のアルバムは『Enter My Crypt』でした。サシャの見解では、この作品はさらに彼の理想に近づいており、特にインストゥルメンタル色が強く、よりクラシック寄りの志向が強まっています。

このアルバムは事実上、Korg Wavestation シンセサイザーと Roland W-30 サンプラーを中心に構成されていました。W-30 にはバイオリン、チェロ、ダブルベース、オーケストラパーカッション、フルートなど、標準的なクラシック楽器のサンプルが入っており、ほぼフル・オーケストラの音源を使っているわけです。

ですが、この二作はミニマルな音楽がちょうど興隆と頂点を迎えていた時代においては、あまりにもクラシック的かつメロディックすぎたのかもしれません。結果、広範囲のリスナーに届きにくかったようです。

その次のアルバム『Lips Like Red』には、いまでも人気のある曲が初めて収録されました。"Bomb the World" という曲です。サシャが 10 代で苛立ちを抱えていた頃に書いたもので、ちょうど New Model Army の "I'd Love the World" を聴いたばかりの日に生まれた作品でした。彼はその曲を「いい曲だ」と思いながら

も、青春期のどうしようもない鬱屈から「絶対に 'I'd Love the World' なんてやるもんか」と思い、それが "Bomb the World" に結びついたのです。以来、この曲は今なお人々の心に残り、高い再生数やクリック数を獲得し続けています。

歌詞はあくまで象徴的であり、サシャ本人はこれを本気で捉えたことはありません。あくまでも若い頃の感情を表現しただけのものなのです。それでも彼は曲が誤解される恐れには常に注意を払っていました。

その頃にはすでにサシャは Bad Ems を離れ、1993 年に生物学を学ぶためダルムシュタット（Darmstadt）へ移り住んでいました。この時期、彼はゴシックやダークな音楽そのものに興味を失い始めます。何しろそのジャンルで 7 年間も活動していたからです。サシャという人間は常に新しいものを探求しなければ気が済まないタイプなのです。

そんなわけで、『L'État C'est Moi』がこのフェーズの最後のアルバムとなりました。これは、それまで数年かけて試してきた複数のスタイルを雑多にまとめたもので、まとまった作品群というよりは寄せ集めに近いものでした。唯一、この CD でとりわけ異彩を放っているのは "And the Band Played Waltzing Matilda" という曲――エリック・ボーグル（Eric Bogle）のオリジナル曲を非常に独特な解釈でカバーしたものだけでした。

ここから先、サシャは完全にフランクフルトのテクノシーンへと身を置きます。Omen や Dorian Gray といったクラブで、これまでにないタイプの音楽的熱量に触れて、すっかり魅了されたのです。まずはこうした音作りを真似るところから始め、どういう手法や技術に特徴があるのかを探っていました。

彼にとっては、それまで触れてきた古典的理論やモダンロック、あるいはゴシックとは全く異なる未知の世界でした。前例のない体験であり、それは Sven Väth や DJ Dag、Chris Liebing といった DJ のダンスフロアでしか感じられないものだと彼は思いました。特に Sven Väth が率いる "Harthouse" レーベルは、サシャが強く惹かれるテクノスタイルを生み出していたため、とりわけ魅力的だったのです。もっとも、この時期の録音はいくつか残っているものの、これまで正式にリリースはされていません。

かなり後になった 2001 年、彼の親友で同居人であったシュテファン（Stefan）――この人物もエレキギターを弾き、The Cure のようなバンドを好んでいました――が、Ghosting を復活させるようサシャを後押しします。音楽自体は良く、6 年ほど経って「そろそろテクノには飽きが来たな」と思っていたサシャには、いいタイミングだったのです。

そして彼はやはり「何か新しいもの」を作りたがる性分ゆえ、Ghosting のゴシック的影響とテクノ要素を組み合わせるという決断をしました。当時のゴシックシーンで、テクノのキックドラムやベースラインを歌の中に取り入れるのは、まだほとんど考えられないことでした。それが今では広く普及しているのですから、時代の変化を感じさせます。

この新たなステージの最初のリリースはアルバム『Der Magische Puls』でした。このアルバムには、ほぼテクノ寄りのトラックもあれば、両方の要素を明確にミックスした曲も多く収録されており、新鮮味を特によく反映しています。

しかしながら、『Der Magische Puls』も、収録曲も、テクノシーンにもゴシック／ダークロックのシーンにもあまり受け入れられませんでした。新メンバーのビョルン（Björn）が加わってエレキギターが 2 本になったにもかかわらず、です。

そして最後のアルバムでようやく収録された曲 “Lion King” だけが今もよく知られています。しかし同時に、このアルバムが出たあと、バンドは解散することとなり、それから長い間、活動を休止しました。リリース直後にいくつかのライブを行ってはいますが、Ghosting は解散してしまったのです。

その後、サシャは完全に学業に専念し、博士号を取得し、さらにその後は自身のキャリアに集中しました。

そして 20 年が経過してようやく、サシャは再び Ghosting として音楽を作り、リリースすることを決めます。最初のプロジェクトは『Black Romantic』の曲および同時期の他の作品、たとえば『Secret Books』や未発表曲などを新録することで、これらはすべてデジタル配信のみでリリースされました。

一方、Dark Dimensions というレーベルからは、『Black Pearls』と題した Ghosting のベスト版 CD がリリースされました。もちろん、“Lion King” も含まれています。それ以降、サシャは不定期ながら新曲を発表し続けていますが、今のところすべてデジタル形態のみです。

特に注目に値する曲としては、15 世紀の最古の戦争関連旋律を解釈した “Der Flämische Totentanz” や、Pippi Longstocking（長靴下のピッピ）に出てくる子どもの歌を再構成した “Kalle Theodor” などがあります。

2003 年以降、Ghosting は一度を除いてライブを行っていません。その唯一の例外が、2023 年に行われた Wave-Gotik-Treffen の 30 周年記念で、サシャにとってはある意味、大きな区切りとなりました。

そのときのステージでは、サシャはバンド結成以来のヒット曲をすべて演奏し、SITD というバンドで活動するフランク・ダンジェロ（Frank D’Angelo）が伴奏を務めました。この公演の唯一の公開音源は、The Sisters of Mercy の “Amphetamine Logic” をカバーしたもので、デジタル EP『All Your Dreams』に収録されています。

以上が、ここまでの Ghosting の物語です。静かに、ライヴなしで、サシャのソロプロジェクトとして、なおも続いています。しかし確かに続いているのです。